

副作用効果と認識論

飯塚理恵 (Rie IIZUKA)

東京大学大学院総合文化研究科

片岡雅知 (Masanori KATAOKA)

東京大学大学院総合文化研究科

実験哲学の知見の中で最もよく知られているのは、「副作用効果 (SEE)」あるいは「ノープ効果」だろう。Knobe は人々に質問紙法による調査を行い、行為の副作用が道徳的に悪かった場合には、善かった場合に比べ、その行為が意図的になされたと判断される傾向がかなり高くなることを見出した (Knobe [2003])。この現象をどう説明するかに関して、大きく、素朴な意図性概念の中に道徳的要素が含まれているとする見解 (概念能力説) と、道徳的要素が素朴な意図性概念をゆがめているとする見解 (パフォーマンスエラー説) が対立しており、現在も論争が続いている (See. Alexander [2012] Chap. 3)。もし前者の説明の仕方が正しい場合、素朴な意図性概念を説明しようとするタイプの哲学理論は、大きな影響を被ることになるだろう。

Knobe の調査をうけ、Beebe らは同様の効果が知識帰属にも見られるとされるデータを提示し、これを認識論的副作用効果 (ESEE) と名付けた (Beebe & Buckwalter [2010])。ここでも、もし知識概念にとって道徳的要素が構成的であるならば、ある種の認識論は修正を迫られることになるだろう。

本発表で我々は、元の Knobe の調査結果はともかく、少なくとも Beebe らの調査結果は、なんらかのパフォーマンスエラー説で説明されるべきであり、ESEE は認識論に重大な修正を迫るものではないと論じる。ESEE を調査する際に被験者に与えられるシナリオは、その構造上、判断対象とされる信念と、副作用をもたらす行為との間の因果・理由関係を否定するものになっている。当の信念と因果・理由関係のある行為の場合とはともかく、関係ない行為の副作用の善し悪しで、その信念が知識か否かの判断が変わってしまうならば、判断にあたってある種のエラーが起きていると十分言ってもよいであろう。

SEE をパフォーマンスエラーで説明する場合、副作用が悪かった場合に意図性帰属がされやすいという点にエラーを見出す説明が多かった。しかし ESEE の場合、判断対象となる信念に関係する認識的要因は、その信念を知識とするのに十分であると考えられるため、ここでは本来知識判断が行われるべきである。そこで、むしろ副作用が善かった場合に知識帰属がされにくいという点に注目した説明を行う。

【参考文献】

Alexander, J. [2012] *Experimental philosophy: An introduction* Polity Press.

Beebe, J. R. & Buckwalter, W. [2010] The epistemic side-effect effect *Mind &*

Language 25 474-498

Knobe, J. [2003] Intentional action in folk psychology: an experimental investigation *Philosophical Psychology* 16 309-24.